

# 心理学研究は信頼できるか？

## 再現可能性をめぐる

池田功毅, 樋口匡貴, 平石界, 藤島喜嗣, 三浦麻子

2015年11月16日発行 (Ver. 1.0) ●発行元: ちとせプレス

2015年の8月、*Science* 誌に衝撃的な論文が発表されたというニュースが流れました。査読付きの主要な学術誌に発表された心理学と社会科学の研究論文 100 件についてその結果の再現を試みたところ、同じ結果が得られたのは 39% にすぎなかったということです。2010 年以降、心理学の中で研究の信頼性に関する問題がクローズアップされています。何が問題となっているのか、またそれに対してどのような対応が進められているのかを、日本でこうした問題に取り組まれている研究者の方々に話を伺いました。

### Section 1

#### 取り組みのきっかけ

——こうした問題に取り組もうと思ったきっかけは何だったのでしょうか。そのときにどう思ったのかも教えてください。

#### 池田功毅 (以下, 池田):

2010 年に、Daryl Bem の超能力論文<sup>(1)</sup> が社会心理学のトップジャーナルである *Journal of Personality and Social Psychology* (JPSP) 誌に近々掲載されるというニュースを *New Scientist* 誌<sup>(2)</sup> で読んだことが直接のきっかけでした。

人間に未来予知が可能であるというこの論文の結論は、無論現代科学の視点からはありえない内容です。その掲載を JPSP が認めたということは、いわば心理学が自然科学全体を否定したという意味にもとれました。私はいったい何が起きているのかわからず、非常に困惑したのを覚えています。

Bem 論文によって示された問題は、データ改竄や捏造などとはまったく質の異なる、心理学研究の本質に関わるものでした。Bem 論文は JPSP が制定してい

る正規の査読システムを通過して掲載が決定されました。すなわちそれが意味するところは、これまで「正しい」とされてきた心理学研究の方法は、明確な疑似科学に基づいた虚偽の報告を見抜くことができない、何か科学として根本的な欠陥があるものだという事です。そして何よりも重要なことは、我々心理学者全員が、その間違っただけのシステムの中でこれまで研究を行ってきたという事実です。それは端的に、我々自身のこれまでの研究報告の中にも、多くの嘘が隠されている可能性があることを示しています。

それ以降、私は自身の研究遂行に大きな不安を抱えることになりました。この問題を論理的、現実的に解決しない限り、自信をもって自分の研究成果を報告できないと強く感じたためです。以上のような経緯で、私は再現可能性問題こそ、何よりの優先課題と考えるようになりました。

#### 平石界 (以下, 平石):

私の場合、こうした問題に注意が向くようになった最初の大きなきっかけは、ハーバード大学教授であった Marc Hauser の「科学的に不適切な行為」(scientific misconduct) を原因とする辞職 (2011 年) であったように思います。Hauser はカプチンモンキーを用いて非常に多くの (新奇な) 比較認知実験を報告していました。しかし彼が辞職する数年前 (2008 ~ 09 年頃) から、「Hauser の結果は、あそこの super monkey でないと出せないと言われている」といった噂話を耳にし、不穏な空気を感じてはいました。しかしさすがにデータの捏造、改竄といった悪質な行為までしているとは思っていませんでしたので、このニュースは非常に衝撃でした。Hauser 本人への信頼感というよりは、自分の参加している研究領域で、そこまで悪いことが行われているとは、にわかに信じがたかった<sup>(3)</sup>。

その後、Bem の超能力論文があり、そこで池田さ